学園リバース

せか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園リバース

【Ｎコード】
Ｎ４５６４Ｄ

【作者名】
せか

【あらすじ】
ちょっと性格の悪い男の子が主人公です。はちゃめちゃかどうかは分かりませんが、コメディだとおもいます。

プロローグ　決意編

幼少の頃から、顔よし、運動神経よし、頭よしであったこの俺がなぜ小・中と彼女の1人も出来ることなく、ていうか告白すらされることなく卒業してしまったかってえと、つまりそのほぼパーフェクトに近い美点を唯一汚す汚点が、1で99に勝ってしまうっつー史上最悪のものだったのだ。

その唯一の汚点というのは一言でいうと。

性格が悪い。

どんぐらい悪いかって、だから史上最悪にだよ。本人がいうんだから間違いねえ。

俺より性格が悪いって自負があるやつはいつでもかかってこいよ。本物の悪人ってやつをお前の目ん玉の裏っ側に焼き付けてやる。

それとも俺の武勇伝をきかせてやろうか。

小学校1年生の頃だったか。放課後誰もいない教室に忍び込んで黒板に赤のペンキで「クソ」なんて殴り書きしたのは。

中学校2年生のときには先生のコンピュータから期末テストの答案を盗んで全校生徒に配布してやったりもしたな。つーかそれについてはもっと皆に感謝されてもいいくらいだ。

まあなにはともかく、性格はわりぃが頭がいい俺は中学校卒業後、考えた。

こんだけいい才能(もの)が揃ってるってのに、性格って短所1つで彼女の1人も出来ることなく高校まで卒業しちまうっつーのはちっと惜しくねえか？

せっかくだからこの1度っきりの高校生活っつーのを心置きなく謳歌してやってもいいだろう。

で、そのためにしなくちゃならねえことだが、ようは性格さえ無けりゃ完璧なんだろ？
じゃあそんな最悪な性格は隠すまでだ。
つまり、猫かぶり。

猫かぶっていい奴のふりして皆の信頼集めてモテモテで人気者になって……

ゆくゆくは高校を俺の支配下に置いてやる。

一　突入編

入学式当日。
昨日のうちにある程度作戦は立ててておいた。
まずは「優しくて」「明るい」「頼れる」存在に位置付けされなければならねえ。
俺はとりあえず常に笑っているよう意識することにした。
くそ。顔が疲れるっつーの。
それと、彼女をつくるのが第一目標だ。
しかし俺にはどの女が良いとか正直わかんねえし、タイプとかもない。
だからまずは、
女をランク付けすることにした。
A～Fまでの6段評価。そんなかのAランクの女を取り敢えず引っ掛けとくか、つーこと。
もち、チャラい女はなし。そんな女彼女にして俺の好感度が下がっても損だしな。

入学式もふつーに終わり、俺の入るクラスは3組ということで、そこに向かった。
なんていうか、入学式んときもそうだったけど、人（特に女）の視線がキツい。俺は見てくる女を片っ端から評価した。F、F、E、F……
と、あまりの悪さに舌打ちをしかけたところで。
ぼすっ、と前方からくる何者かにぶつかった。
てめぇ、どこ見てあるいてんだ。といつもなら言うところだが……
「大丈夫か？」
ぶつかった相手の肩に手をかける。

すると、そいつがバッと顔を上げた。背中ほどまでにある長い髪の毛がそれにつられてさらさらと動く。
……Aランク。
大きな瞳に長い睫毛、薄く小さな唇は桜色。そのパーツパーツを浮き立たせる白い肌。
美人かどうかはわかんねぇけど、今まで見てきた女の中ではダントツだった。
その女は、驚いたように大きな目を更に大きく見開いた。
そして白かった肌は更に青白くなって、
桜色の唇からは……

「ぎゃ嗚呼あああああああああああああああああああああ！」

耳をつんざくような悲鳴が。
明らかに廊下ですれ違う女達が俺に対して発する「きゃっ」という黄色い悲鳴とは違った。
恐れているような、拒んでいるような、そんな悲鳴。
……すんげぇ不愉快。

「誰があぁぁぁ！　へ、へんな人があぁぁぁ！　ぎでぇぇ！　げっげいざづ呼んでえぇぇ！」

この女を殴ろうと拳を固める右手を必死に押さえつける。
なんだこの女。
そう思う内にどんどんと女の顔は青くなっていき、
どさっとその場に倒れこんだ。

……Fランク。

二　教室編

初っ端から変な奴に出会っちまったおかげで俺の出鼻は挫かれちまった。

最悪だ。なんなんだあの女は。

あの後、俺は倒れてるあいつをほっていこうと思ったが、ここでなにか良いことをしたら好感度アップに繋がると思い、重い重いあの女をわざわざ保健室まで運んでやった。感謝しろ。

俺は自分の入るクラスまで辿り着くとより一層笑みを深めた。これからが重要だ。失敗できねぇ。

そして。

一気に、しかし強くしすぎず、丁度良い力加減で扉を開いた。

ガララ、の音で一斉にこちらに視線が向くのが分かった。俺の顔を一瞥（いちべつ）すると、急に女の目の色が変わる。

ふん。こういう反応が普通だっつーの。

あの女が変人なだけだ。

俺の名前が書かれた机を探す。鹿央坂（かおうざか）　季凪（きなぎ）。「か」は前の方の列だ。

その席を見つけるのにはあまり時間はかからず、そこにどさっと鞄を置く。もちろん乱暴にには置かねえ。

隣の席は女だった。

ちらちらとこっちの様子を窺うようにしては「きゃあっ」いうように両手で自分の顔を覆い隠す。

うぜぇ。なんだこいつ。

なんて思うがそんなことは言えねぇ。

そのかわり、自分の顔が笑ってるのを確認してから

「名前……草山さんっていうの？　これからよろしくな」

と机の名前を確認してから言った。途端に「えー、うん、よろしくー」と興味無さそうに返事を返してきた。けど顔は赤い。喜んで

るのが見え見えだ。……ムカツイた。
爪先を思いっきり踏んづけてやりたい衝動に駆られたが、なんとか堪える。
なんとか椅子に座ったが、貧乏揺すりがしたくてたまらねえ。我慢だ。
しかしストレスの原因は次々と襲ってくる。
「ねーねー、鹿央坂君っていうの？　どこ中？」
いかにも軽そうな女軍団。どうやったらこんな馬鹿共が県屈指の進学校に通えんだよ。
こういう奴らは塊になるとうざい。こうやって明らか身分違いだろうっていう俺にまで話しかけてきやがる。赤信号みんなで渡れば怖くない、だ。
しかもしかもそいつらの後ろでは草薙っていう女が恨めしそうに睨んでくる。「なによ、私の鹿央坂君にっ」っていう嫉妬の目だ。
物凄えイライラすんだけど。
「ねーねー、鹿央坂君女の子のタイプは？」
「ん、別にないけど」
お前ら以外な。
「私、今彼氏いないんだよねー」
「そうなんだ。意外かも」
一生出来ねえよ。
「鹿央坂君ならアリかも」
「あはは」
冗談キツイんだけど。何様のつもりだよ。
しかし俺の受け答えが良すぎたせいか、女軍団はどんどん調子に乗ってくる。
もうそろそろ限界が近づいてきた俺は女共に分からないように目線を逸らした。
すると。
静かに、前の方に取り付けられている扉が開かれていくのが分か

った。その扉の隙間からは、まずなによりも先に黒く長い髪の毛が入ってきた。
俺の優秀な頭はその髪の毛を覚えていた。

Fランクの変人。

保健室までわざわざ連れて行ってやった、あの女だった。
今度は男の視線がそっちに集まる。その視線を感じたせいか、また少し女の顔が青ざめるのが分かった。
女軍団も教室の静かなざわめきに気がついたのか、そっちの方を見て
「わー、なにあの人。すごくない？」なんて驚いた感じの声を上げる。だがその中の1人、別の反応を示す女がいた。
「あー、知ってる。同中だった。襖田（ふすまだ）さんでしょ？」
その後に「あの人ってさ」とつなげる。
「あの人ってさ、超男嫌いなんだよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4564d/

学園リバース

2010年12月18日18時07分発行